

雑誌コギトと伊東静雄

高橋 渡 著



COGITO, ERGO SUM

双文社出版

雑誌コギトと伊東静雄

高橋 渡 著

双文社出版

高橋 渡 (たかはし わたる)

本名 中山 渡。1922年、長野県に生まれ、
1944年、国学院大学を卒業。

詩人・調布学園女子短期大学教授。

〈詩集〉

草食 (1960・青衣社)、冬の蝶 (1974・昭森社)
犬の声 (1987・潮流社) 等。選詩集に昭和詩
大系 高橋渡詩集 (1976・宝文館)。

〈研究書〉

言語感覚を育てる (1981・明治図書)、詩人
研究 抒情の錘 (1982・教育出版センター)。

雑誌コギトと伊東静雄

著者 高橋 渡

印刷 発行 一九九二年六月一五日
一九九二年六月二五日

発行者 橋本 和夫
印刷所 (株) 暁印書館

発行所 双文社出版

〒150 東京都渋谷区渋谷一丁目二〇番地二二号
電話〇三(三四〇七)三四四二

乱丁、落丁本はおとりかえいたしません

雑誌コギトと伊東静雄

目次

第一章 雑誌「コギト」

I 創刊号を巡って

- 1 創刊号にみられる時代意識
- 2 同人の文学意識
- 3 同人雑誌としての特質

II 昭和九年の転機を巡って

- 1 浪漫派の性格の樹立
- 2 寄稿者拡充による新生
- 3 「日本浪漫派」創刊広告の波紋

III 戦時下の様相

- 1 日支事変とコギト
- 2 第二次世界大戦とコギト
- 3 保田与重郎の戦争観

—
71

—
43

—
7

第二章 「コギト」と詩人

I 田中克己 付作品西康省

II 蔵原伸二郎

III コギト詩集

第三章 伊東静雄

I 「哀歌」から「夏花」へ

II 「春のいそぎ」とその周辺

III 「反響」を巡って

あとがき 283

|
257 234 191

|
162 140 99

第一章 雑誌「コギト」

I 創刊号を巡って

1 創刊号にみられる時代意識

雑誌「コギト」は周知のようにデカルトの〈コギト エルゴ スム〉からとられた、いかにも学生好みの高踏的な響きをもつ誌名である。保田与重郎は耳順に近づいた昭和四二年に往時を回想して「幻の巷にしばし別れをつぐといふ古人の一句は、わが本懐であり、我らの時代の青年は、学芸の理想をかざして、栄華の巷を低く見る山上に嘯くを以て本願としてきた」（日本浪漫派の時代）と述べているが、そんな学生のただよわす高踏脱俗の浪漫的な香気を感じさせる誌名である。また、デカルトが中世世界の通念に懷疑した果てに「我思う」と疑う私の存在を絶対としたように、昭和六年（一九三一）の満州事変を大きな転換点として変動する時代を生きる青年たちの衝迫される個我的意識を感得させる誌名でもある。

その「コギト」の創刊は昭和七年三月である。いま、復刻版を手にとると、表紙は無地で、右

肩に黒で〈コギト〉、左下に緑で〈1〉とあり、扉も〈COGIT0〉と黒くあるだけのそつけない地味なものである。これが変わるのとは同人たちが大学を卒業した年の二六号（昭9・7）からで、表紙にヘルダーリンの「ヒュペリオン」の筆蹟、慶州出土の磚文様墨拓等、扉にエジプト十八王朝期の奏楽舞蹈装画、コルネート古墳の墓壁画等、古典的な雅趣ある文物が用いられるようになる。ともあれ、創刊時、表紙も扉もこうしたのは「名前の意味を出さうとした」からだとは、二号後記における保田の言である。

その創刊号の目次は次の通りである。（一）のジャンルは「『コギト』既刊総目次」（9号）を参考にした上での仮称であり、作者下の「」は本名で、これも補足したものである。

手紙（小説）	肥下恒夫	四
やばん・まるち（小説）	保田与重郎	一〇
義眼（小説）	若山隆（相野忠雄）	二二
明暗（小説）	薄井敏夫	二九
あど・ばるうん（小説）	三崎皎（杉浦正一郎）	四八
贅沢な買物（小説）	園聆治	六七
時間（詩）	沖崎猷之介（中島栄次郎）	七七

呪咀(詩)

田中克己

七八

雨(詩)

山内しげる〔中田英一〕

八〇

ジンメルと言葉(翻訳)

服部正己

八一

印象批評(評論)

保田与重郎

八七

編集後記

一〇二頁からなる創刊号には大東猛吉〔松下武雄〕の評論はなく、「芸術と生活」という「芸術家に於ける芸術的衝動と人間的衝動は芸術以外によつては満足されない。換言すれば、芸術家の経済生活も社会的欲望も又芸術活動の純粹な美的満足も芸術によつてのみ充たされる」、ここを基盤に芸術と芸術学の新しい方向を探究する論文の連載の始まるのは、三号からである。その松下を除いては、「コギト」の前身ともいえる、大阪高校時代の「炫火」の主要な仲間顔を描いている。この態勢はほぼ二五号まで続き、この間に、彼らの一年以上級の三浦常夫〔小高根太郎〕が六号、高校は佐賀、しかも四歳年長の伊東静雄が一五号から加わるものの、中井正一・亀井勝一郎・本庄陸男・大山定一・芳賀檀・藏原伸二郎・伊藤佐喜雄・小高根二郎らを執筆者、あるいは同人に迎えるのは二六号以降のことである。

創刊号を見て、まず驚くことは評論が保田の一本のみ、小説が六本と多いことである。これは

十年代における「日本浪漫派」の文学活動が保田・亀井・中島の評論、田中・伊東・蔵原らの詩によって印象づけられているからのことだろうが、保田だけでなく、後年の俳文学者、芭蕉研究家の杉浦正一郎までみずみずしい青春の悲恋をテーマに小説を書いているのである。しかも、これら小説群のうち、肥下の「手紙」、若山の「義眼」はプロレタリア小説として位置づけられても通用する性格のものである。

肥下の妻に宛てた書簡体の小説は「三十年に近い年月の間、画工がとるべき精進と、たれもが持たねばならぬ以上の技術とを私は腕に貯へて来たが、今にして一本の腕の脱け殻に過ぎないことを知った。この細い腕をふるつて私は闘ひ、街頭に隠れ、子供のやうに走らねばならないのだ。」という絶望的な状況設定のもとに、妻である「お前」を芸術の暗喩としても読めるように描き、「お前はプロレタリアの健康な婦人達の真似をして見たいと思ふか。だが、お前には出来ないと思ふ。」と逡巡はするものの「お前」に心をひかれる。しかし、ひかれながら「私は死を期して出かける。何の故か私にはわからない。私が臆病なためだらうか。私はつねに怖ろしい。」と傷つく青春の魂、デスペレートな心情を昭和三年三月の共産党員の大検挙、六月の治安維持法改正による弾圧強化の下で展開されるプロレタリア運動に参加することで、救出しようとする。そして「明日私ははげしい闘争に出かけねばならない。お前にはもう会はないであらうと思ふ。」と結ぶ。ここにはプロレタリア運動への共感を余韻としながらも、その運動によって招来される

希望はない、絶望的な、出口のない暗澹とした心的状況からの脱出を、死を期するという運動への捨身、献身によって果たそうとする精神状況が表出されているところに特色がある。

この「手紙」は習作の域を出ない、形象方法の未熟な、構造に内的な凝集力をもたない作品であるが、これを巻頭に位置づけることで、同人の複雑な心的状況を象徴させる意味が編集意図にあったのかも知れない。同人のなかで殊に多く、時代の不安、危機、終末感という語句を七年から一〇年にかけて用いたのは保田与重郎であるが、これは創刊時の同人に共通する時代意識であったと言えよう。

中島栄次郎の「時間」につぐ「落魄」は次のような短詩である。

ひやりと磨きすまされた銃身が二挺、——その中で衛兵が眠りこけてゐた。

田中克己の「呪咀」三篇中の「尺獲虫に」、

をのれ 他人^{ひと}の国の山川を よくも勝手に測量しおきをつたな

いずれも「詩と詩論」のエスブリ・ヌウボオの洗礼を受け、北川冬彦「検温器と花」、「戦争」、

安西冬衛「軍艦茉莉」に学んだ痕跡のある、シニカルに対象を通して時代の本質を把握しているこの作品にも、引用は省略するが中島の「時間」、田中の「碑文」「漠」にも個性の違い、方法の違いは当然あるものの、時代のもたらす不安、危機の意識が濃厚である。純粹な抒情に遠く、対象は非情な目でその亀裂がとらえられ、詩語は重く暗示性を与えられ、作品は喻的世界となっている。ここにも閉塞された心的情況からの脱出に賭ける青年の、屈折を強いられた時代意識がある。田中は後年、これら三篇を「反帝国主義の詩」(復刻版 解説)と自注してもいるが、時代のまがまがしさへの憤怒から発想されていることも注目したい。

このように、「コギト」は昭和七年という昭和史の分岐点ともいえる時代を反映しながら発足したのである。換言すれば、都市では失業者の増大、農村では米価糸価の暴落による危機の深刻化、軍部による満州事変から上海への戦火拡大、軍人と右翼によるテロの横行、強権による反体制運動への弾圧強化、プロレタリア文化運動自体の内部分裂——この経済・政治・思想の混乱が生んだ絶望感、危機意識を濃厚にもって創刊されたのである。

一方、その誌名のもつ高踏的な姿勢、保田の回想する「巷を低く見る山上に嘯く」ような超俗的、浪漫的な作品がある。それは保田の小説「やばん・まるち」である。これは、昭和一四年に松下武雄の遺稿集「山上療養館」の編集後記で松下を悼み、創刊時を回想して真率に直叙する文章の一節、

我々はそのころハイデッカーとか、フッサールやシェラーなどを云つてゐた。文学上の芸術派は、我々のまえから遊戯の文学として退き、左翼文芸はその無思想によつて、ただ良心的な機を我々に与へてゐた。そうして我々は哲学の美文的情緒に、詩の外延を味わつてゐたのである。しかし我々は表現にあこがれてゐた。

その「表現にあこがれてゐた」青年のもつ浪漫的な意識と心情を、敗北し滅びゆくことこそ勝利というイロニカルな美学によつて構想したのが、「やぼん・まるち」である。これはまた、芸術を至上として生きる人間の悲劇的な精神、ディオニュソスの人間を生を追求し、それを肯定するだけでなく理想とする、反時代的でもあれば反俗高踏の反社会的な作品でもある。この作品については桶谷秀昭の「保田与重郎」(新潮社、昭58刊)に詳しいので簡単に筆を止めておくが、これは保田の文学気質にある耽美放埒の溢れでた、詩的香気を放つ小説である。とともに、小説観の通念を無視した小説であるが、特にその末尾のもつ嫵嫵の余韻には保田与重郎という人間の美意識、生の意識が湧出していて、後年、彼の主唱する「浪漫主義」の確かな萌芽が感じられる。引用の前に、筋を紹介しておこう。フランス人に西洋の作曲法を学び、幕府の採用した洋式訓練のための行進曲の作曲を思い立った幕臣が、一応は完成してもそれを限りなく改作する。ラ・マルセイエーズの革命的旋律を思わせる曲と最後にはなつて残される曲であるが、「新しい曲の

続作よりも一曲の完成に精根は最後の一滴まで注がれてゆかねばならない」デモニーッシュな芸術意欲にとらえられる。いつか作曲の目的も忘れ、衰亡はげしい幕軍への関心もなくなった。フランス人の「君の心 日本武士の気持たるか」の問いにも「われ芸術を破り、心を破らん。つひに肉体まづ敗るべきものなるか」と笑って答える。幕臣はおのれを繞る情勢に全く無関心、小鼓を鳴らしては新しい気分の移入に心血を注ぎ、楽譜の加筆、訂正、抹殺に狂気したような日々をすごす。そして、幕府最後の上野の戦い。「遅かれ早かれくる集団的な生命の終焉」を前に、彼の加筆批正は続く。そしてその最後を、次のように描くのである。

いつか作中には山中の雰囲気が、こゝ何年来の鬱積した社会感情をより濃化して入り込んでしまつてゐた。偶然に彼は自分の芸術を満足せしめる為に、自分はこゝ迄きたのだらうかとひそかに考へることもあつた。それは芸術と自分の肉体を同時に一方に完成を感じ、そうして一方を殺すことではないのか。気分の押進をそれより他の方法でおしとゞめるすがあらうか？上野のあつけない陥落は昼頃だつた。あひ変らずに喪心して鼓をうちつゞけてゐた「まるち」の作者は、自分の周囲を殺倒してゆく無数の人馬の声と足音を夢心地の中で感じた。しかし彼は夢中になほも「やぼん・まるち」の曲を蔭々（マヤマヤ）と惻々と、街も山内も、すべてを覆ふ人馬の響や、鉄砲の音よりも強い音階で奏しつゞけてゐた。——彼にとつて、それは薩摩側の勝ち矜つ